



# カメラ探訪

## 文学のふる里

その11 杖立温泉



花扇

— 火野葦平 —

「川をはさんでもうもうとたちのぼるまっ白な湯気にもたそがれの色がきざしてきた。

紅葉につつまれた山峡の底にあるこの閑寂な湯の町は……」。『花扇』は、火野葦平が十年の歳月を費やした『幻燈部屋』（全六部）の第四部をなす作品で、この小説をかくため二度も杖立を訪れている。

わたしの  
ふるこの  
郷土

山鹿市立山鹿小学校 六年 江崎 秀徳

清流菊池川、古い歴史を彩る数々の古墳群、数百年の昔からこんこんとわきでる豊富な温泉にかこまれた山鹿、これが僕達の住む郷土山鹿市である。

緑の山々にかこまれ、ひとときわそびえる不動岩。桜、つつじと美しく咲きほこる日輪寺の山。全国的に名高い、国指定史跡の鍋田横穴、弁慶が穴、チブサンなどの装飾古墳。なお、近頃のこの山鹿は、数年間にすばらしい発展を上げようとしている。再開発により、山鹿の中心地は前の面かげは全くなくなり、美しく近代化した温泉ビルには、商店が一室に集まり、広々とした市民会館、駐車場、僕達が伸び伸びと遊べるお祭り広場、温泉プール、周辺には南国を思わせるサルビアの花々。

菊池川を渡る「大ぜき橋」もつくられた。これは、菊水町で九州縦貫自動車道につながる。

又衛生的で快適な生活環境をもつための、下水道工事も着々と進み、市民スポーツセンター、遊歩道の開設と、観光都市山鹿も年々発展しつつある。

桜の花咲く春の「温泉祭」夏の夜空を彩る「山鹿灯籠祭」は、あまりにも有名である。毎年八月十六日、夜明かし祭りの夜、山鹿小学校のグラウンドでくりひろげられる千人灯籠踊り、くらやみの中にゆれる金灯籠の光の流れは他で見ることのないすばらしいものである。そして、いたるところの街かどに飾られた神殿造り、屋敷造りなど二十数基の紙のりの芸術品は、人の目をうばってしまう。

また「山鹿干軒たらいなし」と、昔から言われているように、豊富なお湯は山鹿にとっては観光のいのちである。又産業も米、麦、スイカ、メロン、野菜、煙草、みかん、畜産、工業などさかんである。

僕は、この長い歴史を持つ湯の町山鹿に、生まれ育ったしあわせを忘れないで、いつまでも、それを大事にし、守り伝えていきたいと思っている。